

新出 奈良絵巻『相生の松』

板 坂 則 子
井 黒 佳 穂 子
安 岡 充 令

『相生の松』は伝本の少ない御伽草子で、当初は天理大学附属天理図書館蔵の奈良絵巻と藤井隆氏所蔵本が知られるのみであったが、天理本は『室町時代物語大成十二』に翻刻が載るが書名欠で脱文があり、『松ヶ枝姫物語』と仮題が付けられていた。また藤井氏本は零本で『松たか彦物語』との書名を持つが、両本を合わせてもなお物語の全貌が判明しない作品であった。その後、赤木文庫旧蔵本（『室町時代物語大成補遺一』に翻刻が載る）の奈良絵巻や海の見える杜美術館（旧王舎城美術寶物館）蔵の奈良絵巻等の出現により、その本来の書名『相生の松』と物語の全容も明らかになったものである。板坂架蔵の『相生の松』一卷は、本文部分に錯簡が見られるものの保存状態も良好で、比較的古態を保っている奈良絵巻である。本稿では、この架蔵本（以下、I本とする）の紹介、および本作品にいささかの考察を加えるものである。

一、『相生の松』について

『相生の松』は相生の松の由来によせて、国の繁栄を言祝いだ物語であり、『さざれ石』や『鶴亀物語』と同じく祝

儀物に属する作品である。まずは以下にあらすじを述べる。

昔から今に至るまでめでたい物は数多いが、特にめでたいものは松である。播磨国高砂の浦に松ヶ枝姫という美しい姫神がいた。庭に姫小松を植えていたが、年月を経るごとに生い茂り、風が吹くと葉擦れが琴の調べのように鳴るのであった。一方、摂津国住吉の里には松高彦という神がいた。この神は伊邪那岐命が日向国橘の小戸の櫛ヶ原で禊ぎをした時に、潮の中から生まれた神である。神功皇后が三韓征伐に赴いた際にも随従し、三韓を平らげて日本に帰る途中、摂津国に住みついて住吉明神となったのである。ある時、松高彦は風に紛れて琴の調べが聞こえてくるのを不思議に思い、舟に乗って播磨国へ辿り着いた。人家の庭に植えられた姫小松が、風が吹くたび、琴のような音色を奏でていた。松高彦が聞き惚れているうちに、すっかり日が暮れてしまったので、家の主に一夜の宿を願う。主の松ヶ枝姫は道に迷った男が仙境を訪れて、美女と夫婦になったという唐土の故事を引いて、「どうかここに留まって私と夫婦になってください」と引き留めた。松高彦は「君は女松を、私は男松を植えよう。国は違ってもいつまでも通おう」と語って住吉に帰った。それからのち松高彦は変わずに通い続け、二人が植えた松も年月を経て大きく成長した。いつしか、夫婦の神は齢を重ねて白髪となったが、松の下で音楽を奏すると、たちまち二人とも若返った。ついに夫婦の神は飛仙となって天に上がったが、二人の深い契りは植えた松と共に残された。これにより国はいっそう繁栄し、民はこれを「相生の松」と呼んだ。古今集の序に「高砂住の江の松も相生のやうに」と書かれるのは、この松である。

本作品は、世阿弥の謡曲「高砂」を素材とした物語である。謡曲「高砂」は古くは「相生」「相生松」の名で呼ば

れており、『古今和歌集』の序文「高砂住の江の松も相生のやうにおぼえ」から着想したものであるらしい。高砂も住吉も松の名所であった。本絵巻もまた、文中に「古今の序にしるしつ、高砂すみのえの松も相生のやうに」とあることから、これらの作品との関連性がうかがえるが、物語の主人公は松の精たる老人ではなく、若々しく美しい松ヶ枝姫と松高彦であり、松の由来をいわば二人の「なれそめ」を中心に描いたところに特色があるといえよう。

さらに謡曲だけではなく、いくつかの説話や伝承が織り交ぜられている点にも注目したい。松高彦の前身は、黄泉の国から戻った伊邪那岐命が、日向国橘の小戸の櫓ヶ原で禊ぎを行った時に、潮の中から生まれた神であった。神功皇后に随従して三韓征伐に赴き、日本に帰る時に摂津国住吉に留まって住吉明神となったことは『古事記』『日本書紀』などにも見られるが、本作品では住吉明神が国の鎮守であり、民に豊かさをもたらす神であることが強調されている。

松高彦は琴の調べを頼りに播磨の国を訪れるが、それは琴ではなく松の葉擦れであった。松風を琴の調べに喩えることは、藤原兼輔の「夏夜、深養父か琴ひくをききて」として「みしか夜のふけゆくまに白妙の峰の松風ふくかとそきく」（『後撰和歌集』）をはじめ、源重之の「しら波のよりくる糸を緒にすけて風にしらふることひきの松」（『夫木和歌抄』）などの和歌に詠まれており、また高野本『平家物語』巻六「小督」にも小督を探索源仲国が、微かに聞こえてくる琴の音を頼りに「峯の風か、松風か、たづぬる人のことの音が、おぼつかなくはおもへども、駒をはやめてゆくほどに、片折戸したる内に、琴をぞひきすまされたる」と小督を見出すくだりが見られることから、これらの知識を元に創作されたものであろう。ちなみに、住吉明神が宇治の橋姫のもとに通っていたという話は『袖中抄』などに見られるが、「夜やさむき」の歌は『新古今和歌集』に住吉明神の御歌として収録されている。

本文には松ヶ枝姫が松高彦に、唐土の話として「列晨阮りうしんけん」という男が山中に迷って仙境を訪ねるという仙境訪問譚

を上げ、「桃源はもろこしのせんきやうなり尾上はわかつてうの仙境そかし」と語る場面がある。桃源郷といえは陶淵明の「桃花源記併詩」が有名だが、本絵巻とは内容が異なっていることから典拠とは言えまい。六朝志怪小説の『幽冥録』や唐代の教養書『蒙求』に収められている仙境譚に、劉晨・阮肇（りゅうしん げんちさう）という二人の男が薬を採るため山に入り、帰れなくなつて山中をさまよつてしていると、川から胡麻飯の入つた杯が流れてきたので、人里が近いと思つて川を上る、というくだりが見られる。本作品にも上流から胡麻や盆が流れてくるという場面があることから、おそらくこちらの話を参考にしたものだろう。

二. I 本『相生の松』書誌

〔年代〕 近世前期か

〔形態〕 写本、卷子本、一軸

〔寸法〕 縦 三三・二センチ、横 一一・九四、六センチ

〔料紙〕 鳥の子紙に金泥にて下絵を描く

見返 一枚、本文 二五枚、後見返 一枚、計 二七枚

〔挿絵〕 計六図

泥絵の具による濃彩にて描く

〔表紙〕 紺金糸市松模様布表紙

〔外題〕 貼題簽（原装）、縦 一六・三センチ、横 三・五センチ

金地雲模様料紙に書き文字にて「相生の姿」とある

〔内題〕 なし

〔見返〕 金地

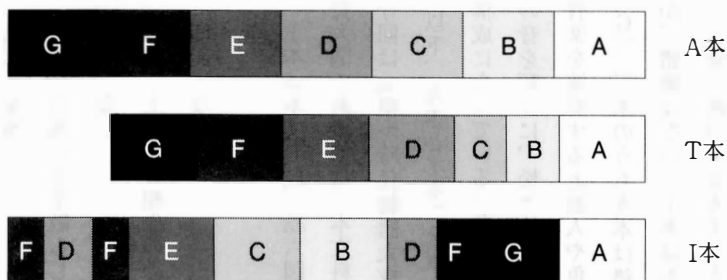
〔紙背〕 白地に金箔散らし雲母刷り

〔奥書〕 なし

〔箱書〕 上部に「相生の姿」と打付け書き

〔印記〕 なし

I本は本文七段、絵六図から成っている。一つの章段が本文料紙の三枚前後であり、絵は最後の図が料紙二枚分の長大図である他は、本文料紙一枚とほぼ同じ大きさである。また、I本には錯簡と思しき箇所が見られることから、今回は『室町時代物語大成』に所収される天理大学附属天理図書館蔵本（以下、T本とする）と、赤木文庫旧蔵本（以下、A本とする）を用いて本文の比較検証を行い、本文の錯簡状況を図に示した（図1）。いずれの伝本も七段構成になっている。各段の内容は以下の通りである。松ヶ枝姫の名前の由来（A）、松高彦の来歴（B）、松高彦が琴の音を頼りに、松ヶ枝姫の邸を訪ねる（C）、松ヶ枝姫と松高彦の会話（D）、唐土の仙境譚（E）、年老いた二人が音楽を演奏すると仙人や魚たちが集まってきたこと（F）、二人が飛仙となって去った後も、国はいつそう繁栄した（G）。三本のうちA本は錯簡もなく、本文もほとんど整っている。T本は（B）と（C）に大きく脱文が見られるが、錯簡はない。I本は本文は整っているが、全体的に錯簡が見られる。以下、順番に見てゆく。まず、（A）にある第三紙の本文末尾「またとし月はかさなれとも御かたちはいよくわかやかにおとろふる色はまします」の後に、挿絵をはさんで（B）の「こゝにまた津の国すみよしの里にすみよしのうらに松高彦のみことゝて御神おはしま



【図1】本文の錯簡状況

しけり」と松高彦の紹介が続くのに対して、I本では挿絵の後、第五紙、六紙に（G）の「けにもきとくは有明の月のいるさや西のかたより紫雲たなひき」と、夫婦が飛仙となって天に昇る場面に繋げている。次に第八紙は住吉に帰った松高彦が、夜ごと高砂に通い続け、やがて二人とも年老いたので、松の下で齢を返す音楽を奏することになり、富士、熊野、熱田の神仙たちが集まった、という（F）の一部が書かれている。これは第二十三紙の本文末尾「君はめ姿をうへ給へわれはお姿をうへそへて」と、第二十五紙の本文冒頭「をんかくをそうし給へは海底のうろくつともあまりのかんに磯やなきさにあつまりてちやうもんするこそ有かたけれ」との間にくるべきである。さらに、第九紙の本文冒頭「せんきやうなりみつかにかくれてこのところにすむとはたかしらまゆみ」は（D）の後半部に当たる部分であり、本来は第二十四紙の本文末尾「神代のいにしへより世のつね人などはきたりすむべきところならずやことなき」に続くものである。これらの錯簡は本文中には見られず、料紙ごとに存在することから、おそらく書写された段階には錯簡がなく、装丁される段階で誤って継がれたものと考えられる。

次に絵について述べる。絵はどの伝本も六図となっている。A本

およびT本の翻刻を載せる『室町時代物語大成』には図版がないため、絵を知ることはできない。I本も全六図である。絵は細部まで丁寧に描かれており、状態が良い。本作品の舞台は主に国内だが、高砂や住吉は仙境と見なされていることから、建物や登場人物の装束はいずれも異国風になっている。松ヶ枝姫の邸の庭には、松高彦が訪ねる契機となった姫小松が描かれている。まずは順番に見てゆこう。第一図は建物の中に座す松高彦を描く。第二図は侍女たちにかしづかれて琴を奏する松ヶ枝姫と、松高彦を出迎える女童を描いている。第三図は松高彦と松ヶ枝姫が並んで座している。第四図は建物の中に座す松ヶ枝姫を描く。第五図は布を濯ぐ二人の美女と木陰から窺う男を描く。第六図は仙人たちが集まって楽を奏する様子を描いている。第一図から第四図までは本文と絵が合っていないことから、絵の方にも錯簡が起きていると思われる。このことを確認するため、海の見える杜美術館蔵本（以下U本とする）との比較を試みたい。U本は二〇〇六年七月から八月にかけて同館にて行われた「物語絵―奈良絵本と絵巻に見る古人のこころ」の展示目録と、『思文閣古書資料目録』（第一五五号、一九九八年六月）にて全六図のうち五図までが確認できる。こちらにも順番に見てゆく。第一図は建物の中に座す松ヶ枝姫を描く。第二図は建物の中に座す松高彦を描く。第三図は松高彦と松ヶ枝姫が並んで座している。第四図は集まって楽を奏する仙人たちを描くが、I本が人間だけを描いているのに対して、U本では聴聞に来た海の生き物たちも描いている点には注目できる。第四図までは前後の本文から絵の配置がわかる。さらに配置は不明だが、参詣に来た人々を描いた図もある。I本の第一図とU本の第二図、第三図と第三図、第四図と第一図、第六図と第四図がそれぞれ対応していると思われる。I本の第二図と第五図は、U本には見られず、U本の第五図はI本には見られない図様である。

この二本の図様と配置の状況を図に示した（図2）。図様に該当する絵があるものには丸を付け、さらに配置が分かるものは番号を振った。I本の第二図（c）は右側に邸内にて琴を奏する松ヶ枝姫、左側に門前に立つ松高彦と

図様				I本		U本	
a	高砂の松ヶ枝姫			④		①	
b	住吉の松高彦			①		②	
c	琴を奏する松ヶ枝姫と門に立つ松高彦			②			
d	松ヶ枝姫と松高彦		③			③	
e	布を濯ぐ美女と木陰から窺う男		⑤				
f	樂を奏する仙人と渚に集まった魚たち		⑥				
g	高砂に詣でる人たち					○	○

【図2】 絵の図様と配置

(e) に該当する可能性が高い。(c) や (g) が互いの伝本に見られない図様であるならば、本絵巻は本来は全七図であったものが途中で欠落したのか、あるいは絵に異なる二つの系統があるのかもしれない。

先にも上げたように、本文では琴の正体は松の葉擦れの音であり、松ヶ枝姫が自ら琴を奏する場面は見当たらない。さらに、邸内の様子を本文は「あまた人もなした、めしつかふ女わらは一二人のみ侍りて」とするが、絵には二人にかしづく大勢の侍女たちが描かれており、本文と絵の間にも齟齬が見られる。これは、本文と絵の作者が必ずしも近い環境にはないという、絵巻制作の場を表しており興味深い。

女童を描いていることから、高砂を訪ねてきた松高彦が宿を請う場面であると思われる。ところが、U本が第一図(a)と第二図(b)で松ヶ枝姫と松高彦を描いた後、第三図(d)に二人が並んで座している図を置いているのに対して、I本にはU本第三図と同じ図様と思しき第四図(d)がある。U本を実見していないため断定を避けるが、全六図のうち未見の一図は

三、御伽草子『相生の松』と謡曲「高砂」

御伽草子と他の文芸との影響関係についてはさまざまな研究がなされているが、本稿では『相生の松』と直接の関連性が指摘されている謡曲「高砂」を採り上げていささかの考察を加えておく。

御伽草子と謡曲の関わりについては、既に多くの研究成果が挙げられている。両者の相関関係を概観するために『御伽草子事典』（徳田和夫編、二〇〇二年、東京堂出版）に載る四五二作品の解説に見られる謡曲に関わる作品を抜き出し、『能・狂言必携』（竹本幹夫・橋本朝生編、一九九五年、学燈社）等から補足事項を加えたものを「表 御伽草子と謡曲」として掲げる。影響関係と言っても、詞章の引用に止まるものや、テーマに近隣性が窺えるものなどさまざまな階梯が見られるが、表では直接的な影響関係が指摘されているもののみを示した。

まず「A 御伽草子から謡曲へ直接的な影響が指摘されているもの」を見ると、十の謡曲が挙げられるが、その内容は、御伽草子『花鳥風月』が謡曲「花鳥風月」へ、また『源氏供養草子』が「源氏供養」など、当時の貴族にとって必須の教養である『伊勢物語』や『源氏物語』に端を発していたり、『酒吞童子』から「大江山」へ、『玉藻の草子』から「殺生石」といったようにあまりにも著名な怪物退治譚であったり、『天神縁起』から「来殿」や「雷電」へ、『道成寺縁起』から「道成寺」へといった縁起譚も含めて、そのほとんどは御伽草子の成立以前から、物語や説話、伝承文芸として巷間に広く知られていたものを御伽草子を介して取り入れているに過ぎない。対して「B 謡曲から御伽草子へ直接的な影響が指摘されているもの」の方は四二の謡曲が指摘されており、『相生の松』もこの中に入る。すなわち、御伽草子から謡曲への影響よりも、御伽草子に取り入れられた謡曲の方が遥かに多いことになる。けれどもその摂取法を見ると、一作の御伽草子に数曲が影響を与えているものも多く、表に出る御伽草子の作品数は三六に止まる。つまり、一対一の深い対応関係というよりは、近隣の謡曲を取り混せて作成した物語が多いというこ

とになろう。曲想に視点を移すと、名前の挙げられた謡曲はその種類を多い順に見ると、「班女」などの四番目物（二二曲）、「鞍馬天狗」などの五番目物（八曲）、「熊野」などの變物（八曲）、「道成寺」などの四・五番目物（六曲）、「高砂」などの脇能（五曲）、「清経」などの修羅物（二曲）、その他（一曲）となる。中でも「隅田川」「班女」「卒塔婆小町」などは複数の御伽草子に用いられており、祝言性が高い脇能や武士が活躍する修羅物よりも優美に舞う女性を描いた變物、そして「班女」のような狂女、「卒塔婆小町」のような老女を含めて、相対的に女性が主人公のものの方が好まれていることになる。御伽草子の読者層の多くの部分を古典的な物語の読者に繋がる女性が占めていたと考えられることと、この「謡曲から御伽草子へ」の影響作に見られる内容傾向とは重なっているのではないだろうか。

次に『相生の松』と謡曲「高砂」の関係を細かく見ていく。まず「高砂」であるが、『古今和歌集』仮名序の「高砂・住江の松も相生のやうに覚え」に世阿弥が着想を得たものとされているが、この『古今和歌集』の奥義を伝える歌道の繁栄の象徴としての「松寿」を、共に白髪を戴く老夫婦の寿に形象化して舞台に載せた世阿弥の発想こそ、この一曲を脇能の代表作に押し上げた要因といえよう。和歌のめでたさは、相和して共に歳月を重ねた老夫婦のめでたさに通じ、ややあざとさの見える人界の幸せを余すところなく具象化している。そして御伽草子『相生の松』は、この仲良く年老いた夫婦と松を取り合わせて描くことから、あきらかに「高砂」の影響化に作られた物語といえるのである。

それでは、『相生の松』はこの共白髪となった老夫婦の構想の他に、どのような要素を謡曲「高砂」から受け容れたのであろうか。両者の詞章を比べてみると、「住江」のような歌枕や、「高砂の」から「尾上」を導く慣用表現等を除くと、実は「高砂」から直接的な詞章の受け入れをほとんど行っていない。両者の類似表現を並べてみる。

謡曲「高砂」

① 「霜は置けども松が枝の、葉色は同じ深緑」

② 「搔けども落ち葉の尽きせぬは」

③ 「西の海、櫓が原の波間より現はれ出でし神松の」

④ 「四海波静かにて・・・住める民とて豊かなる」

わずかながら右のような表現が挙げられるものの、これもまた詞章や文脈が変えられており、さらに③は『続古今和歌集』神祇、卜部兼直「西の海やあをきが原の潮路より現はれ出でし住吉の神」の引き歌により、④は『続拾遺和歌集』序「四つの海波静かなる御代なれば」を用いているといった具合に、「高砂」独自の言い回しと断定できる表現は見つけにくいのである。

御伽草子『相生の松』が謡曲「高砂」から採ったものは、年老いた夫婦神の祝福された姿であろう。けれども御伽草子『相生の松』の世界はそれに止まるものでは決してない。共白髪の穏やかな姿を更に動かし、「齢を返す音楽」を奏することで二人は若やかな美しい姿と変わり、飛仙となって天に上っていく。絵巻ではその上に仙界を顕すきらびやかな世界が物語の処々に描かれている。この文章のみならず聴覚と視覚を加え、五感の感覚を豊かに刺激して作り上げる物語世界こそ、御伽草子というジャンルの持ち得た中世物語群の豊饒の世界であろう。謡曲も御伽草子も、共に中世という時代に生まれ出た新しい文芸ジャンルではある。しかしながら民衆の芸能から発してその地位を高めていき、精神性を重んじようとした謡曲と、『伊勢物語』や『源氏物語』といった貴族の子女に持て囃されてきた物

御伽草子『相生の松』

「はげしき霜に色かへぬ松」

「霜夜に寒き風の音、秋より冬にいたれども、松は変はらぬ葉色にて」

「搔けども尽きぬ落ち葉」

「櫓が原の波間より、現はれ現れ給ひし御神」

「四方の海、波も静かに国民もゆたかに住める」

表 御伽草子と謡曲

A 御伽草子から謡曲へ直接的な影響が指摘されているもの

番号	御伽草子作品名	謡曲作品名	分類	性質
1	花鳥風月	花鳥風月	四・五番目物	鬼女物
2	源氏供養草子	源氏供養	整物	本整物
3	酒吞童子（大江山系）	大江山	五番目物	鬼退治物
4	足守坊給巻	足守	五番目物	犬狗物
5	玉藻の草紙	殺生石	五番目物	鬼物
6	為世の草子	水無瀬（為世）	四番目物	痴心女物
7	中將姫の本地	芸童山	四番目物	狂女物
8	天神縁起	来殿	五番目物	貴人物
9	道成寺縁起	道成寺	四・五番目物	鬼女物

B 謡曲から御伽草子へ直接的な影響が指摘されているもの

番号	御伽草子作品名	謡曲作品名	分類	性質
1	相生の松	高砂	脇能	男神物
2	藍染川	藍染川（染川）	四・五番目物	恋敵物
3	苅屋の草子	薙刈	四番目物	男物狂物
4	安達原	黒塚（安達原）	四・五番目物	鬼女物
5	和泉式部縁起	賀船寺	整物	本整物
		東北（軒箱梅）	整物	本整物
6	梅若丸伝記	班女	四番目物	狂女物
7	大原御幸の草子	隔田川	四番目物	狂女物
8	かなわ	大原御幸	整物	現在整物
9	中僧	鉄輪	四・五番目物	鬼女物
		車僧	五番目物	犬狗物
10	中僧草子	車僧	五番目物	犬狗物
		鞍馬犬狗	五番目物	犬狗物
		大寺	五番目物	犬狗物
11	賢字の草子	道成寺	四・五番目物	鬼女物
12	小明歌あらそひ	草子流（草子流小明）	整物	現在整物
		鶴越小町	整物	老女物
		卒塔婆小町	四番目物	特殊物
13	小町物語	卒塔婆小町	四番目物	特殊物
14	さいき	清経	修羅物	公達物
15	桜川物語	桜川	四番目物	狂女物

B 謡曲から御伽草子へ直接的な影響が指摘されているもの

16	角田川物語	班女	四番目物	狂女物
		隔田川	四番目物	狂女物
17	摂州東成郡阿倍権規縁起	卒塔婆小町	四番目物	特殊物
18	せんみつ丸	三井寺	四番目物	人知物
19	宝くらべ	鉄輪	四・五番目物	鬼女物
20	娘の碑	千引	五番目物	恋敵物
21	鶴龜松竹物語	鶴龜	脇能	唐物
22	川隠山縁巻	紅葉狩	五番目物	鬼退治物
		養老	脇能	男神物
23	七草ひめ	竹雪	四番目物	人知物
24	紫平夢物語	雲林院	四番目物	痴心男物
25	羽衣物語給巻	羽衣	整物	稻人仙物
26	橋弁慶	橋弁慶	四番目物	痴合物
27	鉢の木	鉢木	四番目物	人知物
		班女	四番目物	狂女物
28	花子もの狂ひ	隔田川	四番目物	狂女物
		花霞	四番目物	狂女物
29	百万物語	百万	四番目物	狂女物
30	舟の威徳	自然居士	四番目物	公尽物
		國栖	四・五番目物	恋敵物
31	松風村雨物語	松風	整物	本整物
32	雪女物語	小娘治	五番目物	恋敵物
33	ゆや物がたり	熊野	整物	現在整物
		安宅	四番目物	侍物
34	義経奥州下り絵詞	勘重娘	四番目物	侍物
		舟弁慶	五番目物	恋敵物
35	義経北国落巻	根持	四番目物	人知物
		高砂	脇能	男神物
36	若みどり	老松	脇能	老神物

凡例

※本表は『御伽草子事典』（徳田和夫編、二〇〇二年、東京堂出版）、および能・狂言必携（竹本管夫・橋本朝生編、一九九五年、学燈社）により作成した。
※「分類」は、脇能、修羅物、整物、四番目物、四・五番目物、五番目物を用いて謡曲の分類を示した。
※「性質」は、謡曲の内容を「能・狂言事典」（西野春雄、羽田 純編、一九九九年、平久社）による分類で示した。

語群の末に位置して、大衆性を強めてより現実的な栄華を描くことに勤めた御伽草子は、同じ時代の元でまったく異なる方向性を持っていたといえる。そのような中で両者は、互いを無視することなく、しかしながらはつきりと自らの領域に必要なものだけを取捨選択し、たくましく自らの特性を活かしていったのではないだろうか。御伽草子『相生の松』は謡曲「高砂」で築かれた「寿」の表象をさらに現実的な表現に変えてみせることで、そのしたたかな特性を見事に見せているのである。そしてこれが決して特例でないことは、表が見せる複数の謡曲を素材として取り入れた御伽草子の作例の多さが、また女性を意識した華やかな内容への変更が如実に示している。御伽草子はかくして新しい物語世界を貪欲に作り上げていったのである。

【凡例】

- 一、個人蔵『相生の松』を翻刻した。
- 二、翻刻にあたり、他の伝本を参照して錯簡を改め、紙継の箇所には「一紙として示した。

【翻刻】個人蔵『相生の松』翻刻

相生の姿

相生の姿
(貼題簽)

それむかしか今にいたるまで
てたきためしとする事はさま／＼
おほき¹その中にもかのひな鶴²のす
たちては千とせをたもつことふきを
しめしまた池の亀のうかひあらはれては
よろつよのひさしきかけをうつすとかや
されともことにめてたきは冬のあらし
のさむき夜やはけしき霜に色かへぬ

「外函

「外題

「見返

姿こそめてたかりけれかゝる事にこそ
長生殿^{ちやうせいだん}の庭のまへにはあねはの姿を
うつしうへ不老門^{ふらうもん}の戸ひらのうちには
姫小松こそ生そめけれどをくもろこし
をたつぬれは赤松子^{せきそうし}といふ仙人は松の
葉をしょくして命をたもつにはかり
なくさてわかつてうのいにしへは駿河^{すまが}の三保^{みほ}「
の松原⁶はところからなる美地⁷として天
人こゝにあまくだりなつともつきしと
詠しけん君をいはふ千秋の鶴やこ
すえにかよふらんしかるに世の中の
草木のしなはさま／＼にわかれてその名
はかはれともおとこ女のみちありてちき
りはつきぬ事そかし連理^{れんり}のえたの
へたてなくねはふ上野^{うへの}のつほすみれたえ
ぬなさはありといへと相生^{あいせい}の名をあらはし
てめてたき事につたへたるははりまの国
高砂のうらに松かえ姫とてかほかたち世

にたくひなき姫神おはしけりこの神を
 松かえと申ける事はすみ給ひける庭の面
 にひめ小姿を引うへてときはの色をあひし
 給へはかくは名付け侍るなりかの姫小松は
 とし月やう／＼ふるほとに枝さかへ葉し
 けりてうらのあらしに吟するこゑさながら
 琴のしらへをなしきけは心もすみわたり
 侍りける松かえ姫これに心をなくさみ木のも
 とをたちさり給はすまたとし月はかさなれ
 とも

御かたちは

いよ／＼

わかやかに

おとろふる

色は

まし

まさす

(絵①)

「2紙

「4紙

「3紙

こゝにまた津の国すみよしの里すみ
 よしのうらに松高彦^{まつたかひこ}のみことゝて御神
 おはしましけり⁹此神¹⁰をまつたか彦と申
 ける御事は忝^{かたじけなく}のみとりのいろかへぬ木
 すゑはたかきえた／＼のしけりあひたる
 ありさま霜夜にさむき風の音秋¹¹より
 冬にいたれとも松はかはらぬ葉色にて
 かけともつきぬおち葉のかさかなる
 としになそらへつゝふかくこれをめて
 給へは忝¹²たか彦と申けるそれよりむ
 かしをたつぬれはかたしけなくも天神
 には第七代¹³いさなきのみかと日向^{ひうか}の国
 たちはなの小戸^{せと}櫛^{あはき}かはらに行給ひ岸に
 くたり波をわけてうしほにたはふれ
 たまひけるにうしほの中よりあらはれ
 出て神と成給ふそのち数千万歳を
 へてすてに人代にをよひ神武^{じんむ}天皇より
 は第十五代神功^{しんくう}皇后と申すみかとかう

らい百濟支那この三韓をたいらけて

日本国にしたかへんとおほしめしたち

けるときかの櫓かはらの波まよりあらは

れ給ひし御神やかて御かたちをあらはし

て神功皇后にまみえ給ひいくさの手

たてはことくこの御神より出たりけり

かくて神功くはうこうもろこしにおも

むき給ふ御とき玉体の武備と成て思ひ

のまゝに三かんをせめたいらけ日本の地に

かへらせ給ふ御とき津の国にいたりつき

て御神こゝにすみよしの給ひてあとを

たれ給へはすなはちしつめまつりつゝふかく

まもりのやしをたてすみよしの明神と

は申すなりかくてとし月かさなりつゝれい

けんならひましまさねは国民うやまひたう

とみてうらの濱ゆふしてかけてまうてく

る事がきりなし八人のやをとめ五人の

かつらおのこつねに社頭にしこう申ししん

「11紙

りよをすくしめたてまつるさつくのすゝ

のこゑはうら吹風のをとつれてなみ木の

松にひゝきをそへたうくたるつゝみの

しらへはきしうつ波にたくへつゝいと、宮

るそにきはひけるしかるにかのすみよし

のうらと申すはさうかいまんくとし

てにしにむかひ四こく九こくのすゑまで

もたゝめのまへにうちつゝき手にとる

はかりにおほえたりされはにや津守の国

夏このうらの眺望をよみける哥にも

朝ゆふにみれはこそあれすみよしの

うらよりおちの淡路しまやま

と詠しけるも此御神の御こゝろをしつか

にあんしたてまつるにもろこしよりも

わかつてうをうかゝひとらんとする事世ゝ

のためしのおほき事かねてよりしろ

しめされつゝ此日のもと四方の海波も

しつかに国民も

「12紙

ゆたかに

すめる

まもりの神と

ならせ給ふそ

有かたき

(絵②)

さてもかの松高彦はすみよしのうらに

いて、松のこすゑをなかも給ふ松花のいろ

十かへりみとりのそらにうつろひてそこ

ともしらすあこかれ給ふか海つらより吹

こす風のひゝきにことのしらへそきこえける

あやしくおほしめし身つからきしにをり

たち一えふのふねにさほさしつゝこゑ

をしるへにたつね給ふ敷津たかつをう

ちすきて難波の三津のはまおもてこかれ

てゆけは名にしおふはりまの国に聞えたる

松のあらしも高砂や尾上の里にそつき

給ふしはしやすらひきゝ給へはかすか也ける

「 7 紙

「 13 紙

ことのねのしらへは爰そと聞と、め舟より

もをりたちつゝ、かなたこなたをめぐり給ふに

かしこなりけるところに家つくりつきゝ

しきに庭のおもに姫姿あまたおひたち

つゝ、いく世へぬらんとおほしくてものふり

たる木すゑの色雲まに入てしけりつゝ、

うら吹風のをとつればえたにひゝき葉に

ふれてたまの緒琴のしらへをなし第一

二の絃のふるかことくひくかことく第三

第四のけんうつかことくあかるかことく

第五の絃のこゑはまた千とせをいはふ

君か代の久しかるへきためしとて万歳

らくやそうすらん国おさまり民やすく

五こくみのりてをたやかなる太平らくも

聞ゆなり松高彦たちとまりつくゝときこ

しめし心にふかくおもひしめてかへらんことを

わすれ給ひ日もやうゝにくれはとりあやしき

まてにくらかりければやかてうちにいらせ

「 15 紙

給ふにあまた人もなした、めしつかふ

女わらは一二人のみ侍りて世にやことなき
 上らうともし火をとらせつゝかへにそむけ
 るかけまでも思ひしりたるありさまなり
 松たかひこのみことはこのよしを見給ひて
 心そらにうかれ給ひおもひのやみちをたとり
 つゝ女のわらはをまねきよせあるしの名を
 たつね給ふにわらはこたへて申すやうこ
 ともをろかやきこしめしをよはすやまつ
 かえ姫と申てつねには庭の松にたはふれ
 ときはの色をあいし給ふ木すゑにひゝく
 琴のこゑに心をすまし給ふなり爰はめて
 たき仙^{せん}境^{きやう}にて世のつねの人なとはきたり
 すむへきところならずとくゝかへり給へ
 といふ松たかひこはきこしめし爰はなにおふ
 はりまかた松のあらしも高砂や尾上のさ
 とゝきくなればそれかし心にも所からさへ
 おもしろやことさらまたわか心につかく

「 16 紙

しめておもひ侍るは木すゑの琴のしらへ
 のこゑうらのあらしに吹をくりて津
 の国すみのえの里まできこえ侍へれば²⁴
 かへらんみちもさたかならすなみまをわ
 くる一えうのふねをは^き岸につなきしかとも
 ふくる夜しほのうなはらに海^あ郎^まのたく火も
 程とをしたゝねかはくは一夜のあくるほ
 と宿かし給へと有ければ女のわらはうちに
 いりてこのよし松かえ姫に申しけるあるし²⁵
 きゝ給ひてすみよしときくからに此とし
 ころきゝつたへて心にかつ事侍へりされ
 とみつかからかわひて住なるとまやのうち
 竹のあみ戸もすさましやしき忍ふへき
 ものもなしあまのかる藻^もをしとねとし
 て一夜をあかし給へかし

さらは

こなたへ

いらせ

「 17 紙

給へとて

うちにいさなひ

たてまつる

(絵③)

松高ひこは大によろこひ給ひつゝあるし
にかたり給ふやうそれかしはこれよりも
をしかのつゝの、つの国や人さへいと、す
みよしのうらのなみ木の松たかひこと申
ものにて侍りわれむかしよりこのかた濱
辺の奈に心をよせ吹こす風になひき
あふ小枝きだのみとりときはなるいろにたはふれ
侍るなりしかるをすみのえのうちわのおち
より吹をくる風に聞ゆることのねにあく
かれ出てこくふねのさほにまかせてこの
ところまできたり侍りしに庭のおもなる
ひめ奈の色になかめのつきせすして日も
すてにくれ侍り君御なさけのふかくおは
して一夜かりねの宿かさせ給ふ事こそ

18 紙

10 紙

返すくも有かたけれとの給へはあるしは
きこしめしされはとよ身つからも心を松に
たはふれて此とし月こそひさしけれきみは
しろしめさるまし此高砂の尾上の里と申
すは神代のいにしへより世のつねの人などは
きたりすむへきところならずやことなき
せんきやうなりみつからかくれてこの
ところすむとはたれかしらまゆみ
やことなき人くにはみゆるもなかく
はつかしやけにこのくには何をかは、
かり侍らん君このところにと、まりて
身つからともろともに奈のときはの
ふかみとり

千世もかはらぬちきりを

なしてすみなれ給へ

かし

(絵④)

むかしもろこしに列晨阮りつしんげんといふ

24 紙

9 紙

14 紙

人ありけり山にいりて薬をもとめけるに
 谷にくたりて水をむすひ侍へりければ
 水の上に胡麻こまといふものゝうかひてみえ
 侍りまたそのあとよりうつくしきさか
 つきのなかれきたりけり列阮りうげんあやしみて
 いかさまにもこの水上に人里ありとおほえ
 たり行てみはやとてなかれにまかせて
 みなかみや谷の岩まをつたひゆく事二事二
 十里はかりとおほしくて山ふかく入ければ
 木すゑの鳥のこゑまでもきゝもなれぬ
 こゝ地してかたはらをみやりけるに桃ももの林の
 しけりあひて今をさかりの花の色匂ひは
 よもにみち／＼たり列阮りうげんしはらくたち
 やすらひ思ひもよらぬみやまちにかゝる所
 もありけるかや木たちさすかにものふりて
 あやしき鳥のこゑ／＼にさえつるまでも
 めつらかなりこはそも人けんせかいにはよも
 あらしいかさま日ころをとにきく仙境せんきやうな

るへしとおもひぬたりけるおりふしさも
 うつくしき女こはう谷のほとりにたちい
 て水をむすひものをすゝく、ありさまなり
 けるか列阮りうげんをみつて大によるこひ君
 をまつ事としひさしいまよりはこの所に
 とゝまりて我とふうふに成給ひなかし
 命をたち給へとて家にいさなひ行つゝ
 ちきりふかきかたらひたくひなくこそきこえ
 けれかくて列阮りうげんはさすか故郷もゆかしく
 て山より里にたちかへればわつかに三と
 せとおほえしかさとは七世まの孫ありて
 列阮たつねあひたりけりふたゝひ山にわけ
 いりてもとの谷水をもとむれ

もゝの

とも

はやし

は

なかり

けり

(絵⑤)

かゝるためしをきくからに桃源たうげんはもうこ
しのせんきやうなり尾上はわかつてうの
仙境せんきやうそかし君たゝ人にましまさず身
つからうき世の人ならす松に心をかけまく
も不老不死ふろうふしのさとりをえてたのしみを
きはむるなり今よりのちはこのところに
とゝまり給ひいもせのちきりをむすひつゝ
たえぬなさけをかけ給へとそかたりたまふ
やうく夜もふけた木すゑのあらしも
こゝろしてふくや千ちとりのなくこゑのとを
くきこえてしはしあれはまたちかくこそ
聞えけれこれや千鳥のなくこゑに塩のみちひ
をしるといふ歌の心もたくひなしかたらひ
よりてをしかものそひねの夢やあけほ
のゝよこもすてにたなひきければ松高
ひこはおき出でてさゝ一夜のかりふしも

21紙

19紙

ちきりのすえはいつまでもかはらて年は
つもれたゝたとひ国をはへたつともかよひ
なれなは君とわかこゝろつかひはとをからし
君はめ柵をうへ給へわれはお柵をうへそへて
いもせの中のいくひさしくちきりはつきぬ
世ゝかけて是をしるしにさためんとて二
もとの松をうへ柵高彦まつたかひこはすみのえにたち
かへり給ひけりそれよりはひたすらに雨
雪のふるときもあらしはけしき折からも
波ちをわくるあまをふね霧まをつたふ
みえかくれ人めを忍ふ心地して夜ことにかよひ
給ひけりかのふうふの御神の手つからうへ
たまひけるめまつおまつの二もとはとし
月にしたかひておなし程なるわかみとり枝
さかえ葉しけりてこすゑは雲にわけ入38
けるかく年月の久しければふうふともに御
かたちのらうしましゝてかしらに雪を
いたゝき給ふさらは木のもとにたちよ

23紙

よはひをかへすをんかくをなすへしとの給ひ
 てにしきのしとねにしきのまく尾上おのえの風に
 吹かへさせねとりの笛のこゑすみて名も
 高砂たかさぎのうらにひゝけは富士とくま野と熱あつ
 田たをは三神仙さんせんの山といふこのうちにこもり
 給ふもろくの仙人たち我もくとあつまりて
 をんかくをそうし給へは海底かいていのうろくつ
 ともあまりのかんにたへかねて磯いそやなき
 さにあつまりて

ちやうもん

する

こそ

有かた

けれ

(絵⑥)

けにもきとくは有明の月のいるさや西
 のかたより紫雲しうんそらにたなひき雲の内
 より吹いつるあらしは松にをとつてふう

「 8 紙

ふの神の身にふるればたちまちすかたは
 わかやかにもとのかたちと成給ふむかし
 すみよしの明神うみかみ宇治のはし姫にかよひ給ふ
 明神きたり給ふときは宇治の川水をとた
 かく朝日山の夜あらしのはけしかりしそし
 るしなるされは明神の御哥に

夜やさむきころもやうすきかたそきの

行あひのまに霜やをくらん

と冬の夜をわひ給ひてよみ給ふときこえしは
 うちにはあらて尾上の夜るのかよひちに
 冬の夜はけしきあらしをとにあかつきを
 けるかたそきの行あひのまの霜をわひて
 かくは詠し給へるなりつゐに年月ふるまゝ
 にふうふの神は飛仙ひせんとなり天にあからせ
 給ひつゝ、ふかき契りはそのまゝに松にのこし
 たまひけり二もとたかひにたちのひていよく
 さかえ侍るを国民くになみこれをいはひまつりめて
 たきためしに引なそらへあひおひの松とそ

「 22 紙

「 25 紙

「 5 紙

名つけ、る古今の序にしるしつ、高砂すみ
のえの松も相生のやうにとか、れしはなかく
つたはる君か代のひさしかるへきためし
にはかねてうへさせたまひける

あひおひの

松の事

とかや

「6紙

の違いなどは採らなかつた。

【校異】

一、参考として左記の伝本との校異を示した。

天理大学附属天理図書館蔵本（天）

赤木文庫旧蔵本（赤）

なお、天理大学附属天理図書館蔵本は『室町時代物語大成十二』（横山重・松本隆信編、角川書店、一九七三年 月）、赤木文庫旧蔵本は『室町時代物語大成補遺一』（横山重・松本隆信編、角川書店、一九八八年 月）によつた。

二、異同は本文に限り、漢字と仮名、仮名遣い、濁点

1 その中にも—その中に（赤・天）

2 かのひな鶴—もりのひな鶴（赤・天）

3 たもつ—たつる（赤）

4 池の亀の—池のみぎはにゐる亀の（赤）

5 はけしき霜—はけしき霜雪（赤）

6 松原は—松原（赤）

7 美地—れいち（赤・天）

8 かくは名付け—かく名を付け（赤）

9 おはしましけり—おはしけり（赤）

10 此神をまつたか彦と申ける御事は—されは（赤）

11 秋より冬に—秋よりふゆそ（赤）

12 奈たか彦と—まつたかひこそ（赤）

13 第七代—七代（赤）

14 いさなきのみかと—いさなきのみこと（赤）

15 とし月—とし（赤）

16 かつらおのこ—かくらおのこ（赤）

17 しこう申ししこうし(天)

18 すくしめ―すゝしめ(赤・天)

19 もろこしよりも―もろこしより(赤)

20 世、のためしのおほきこと―

たひく世、にをよひし事(赤)

21 つき給ふ―つけ給ふ(赤)

22 木すゑの色―木すえの有(天)

23 わが心―我に(赤)

24 ナシ―こゑをしるへにきたりてあり

日もすてに暮れければ(赤)

25 うちにいりてこのよし松かえ姫に申しける

あるしきゝ給ひてすみよしときくからに―

ナシ(赤)

26 心にかつ事侍り―心にかゝる事侍り(赤)

27 人さへ―人さよ(天)

28 うちわの―うらはの(赤)

29 たれかしらまゆみ―たれしらま弓(天)

30 人くには―人くは(天)

31 身つからと―みつからも(赤)

32 列^{りうけん}晨^{しん}阮^{けん}―りうしんゑんてう(赤)

33 二十里はかり―二十四はかり(赤)

34 列^{りうけん}阮^{けん}―りうゑん(赤)

35 女はう―女房二人(赤・天)

36 列^{りうけん}阮^{けん}―りうゑん(赤)

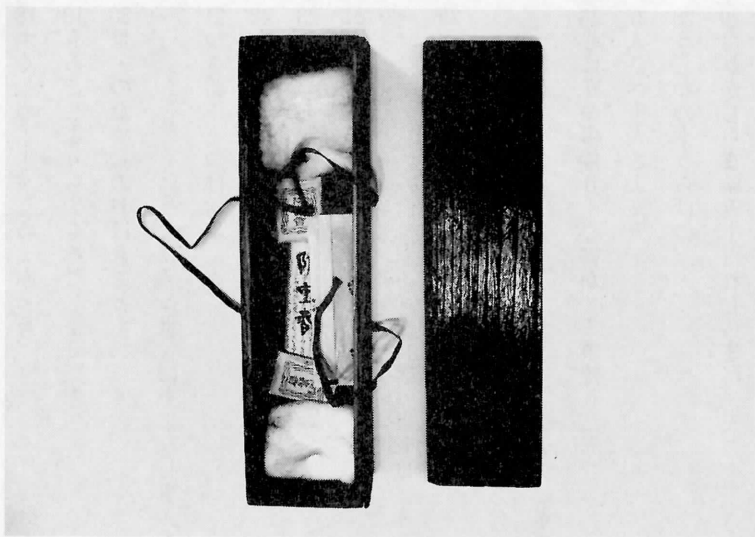
37 千とり―かもめ(赤)

38 わけ入ける―わけいりけり(天)

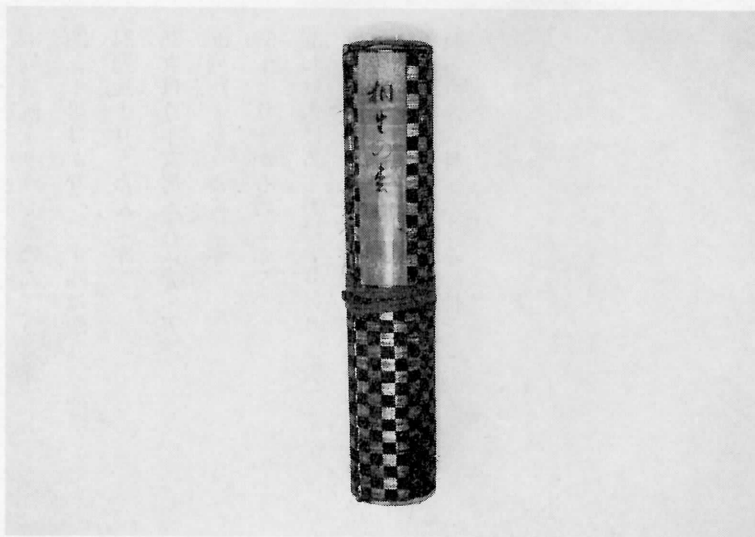
39 にしきのまく―おなしくまく(赤)

40 なきさに―やなきに(赤)

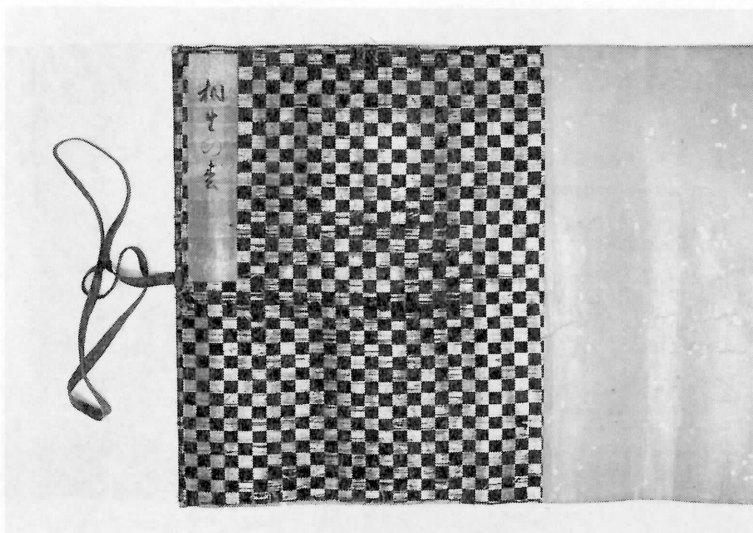
41 ふうふの神―ふうふの神ぞ(天)



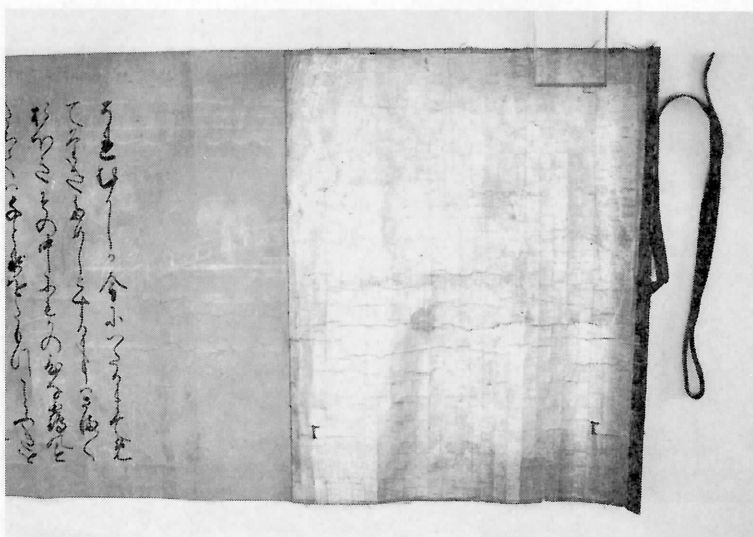
函



題簽



表紙



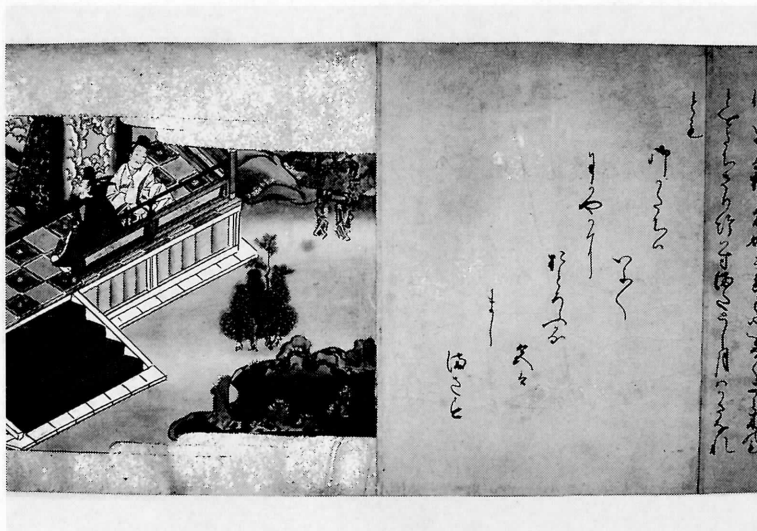
見返



第1紙



第2紙



第3紙



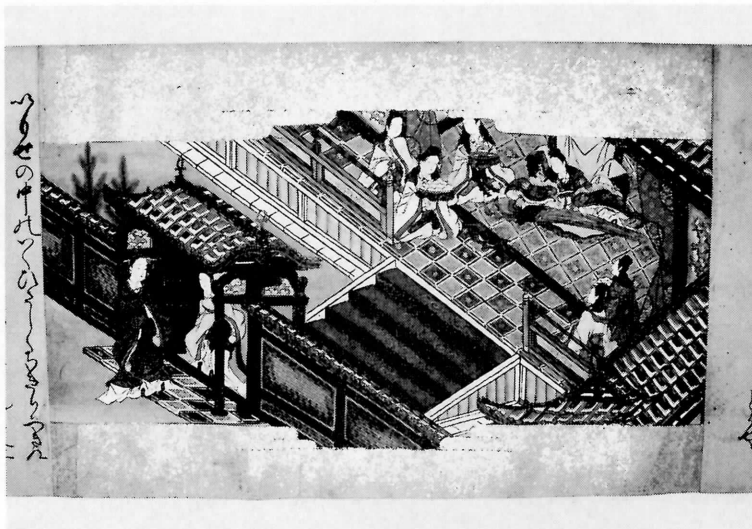
第4紙 (絵①)



第 5 紙



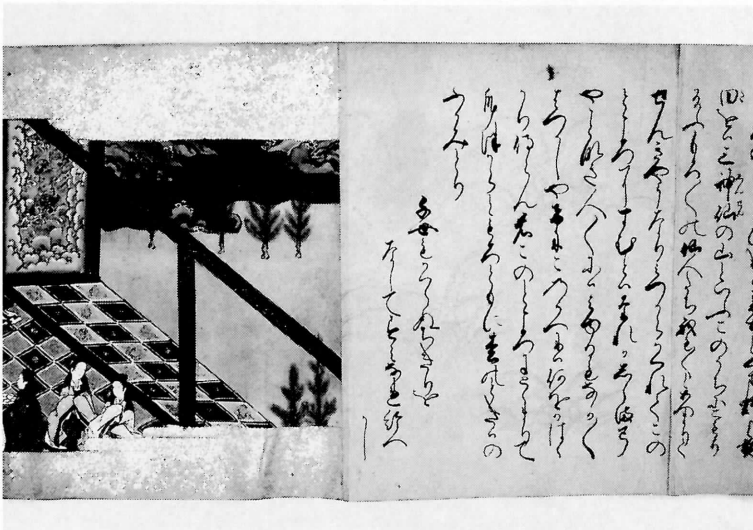
第 6 紙



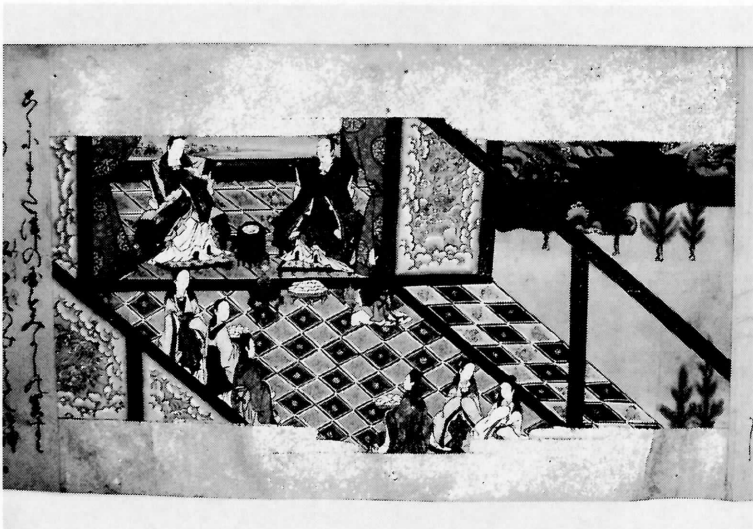
第7紙 (絵②)



第8紙



第9紙



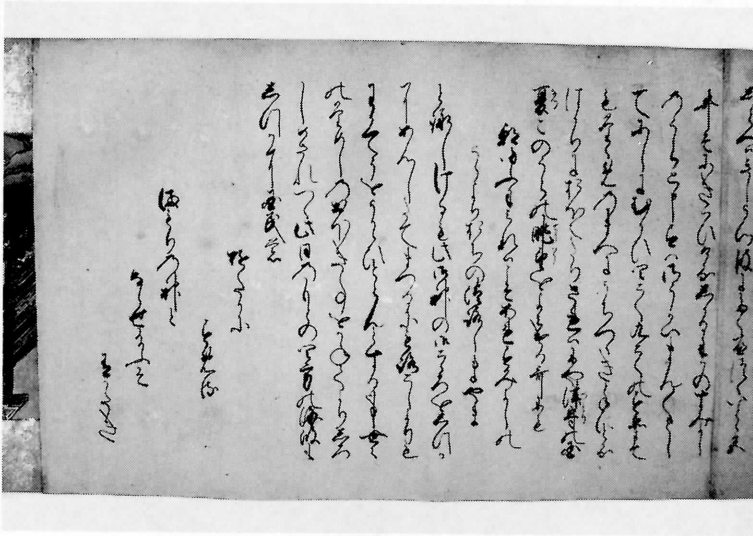
第10紙 (絵③)

[illegible]

第11紙

[illegible]

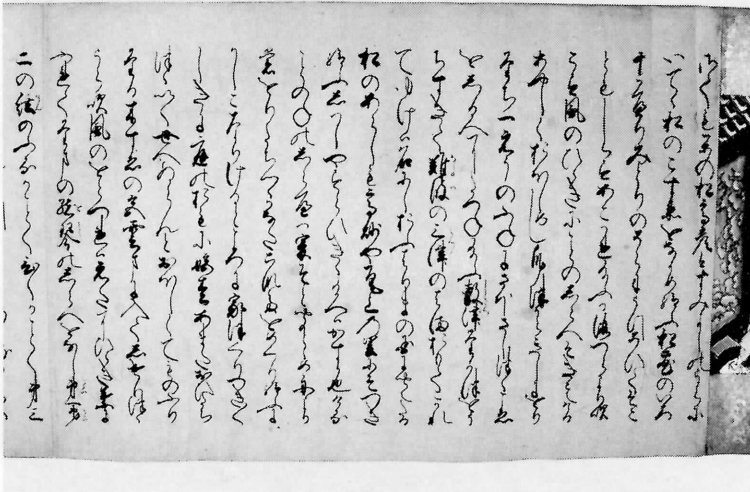
第12紙



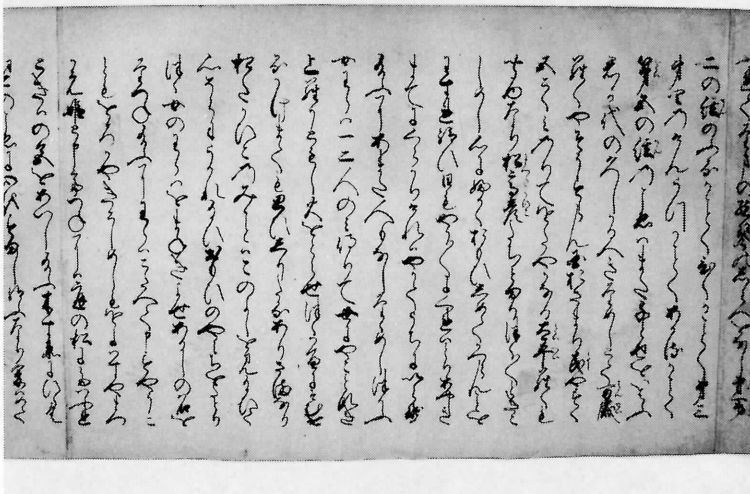
第13紙



第14紙



第15紙



第16紙



第17紙



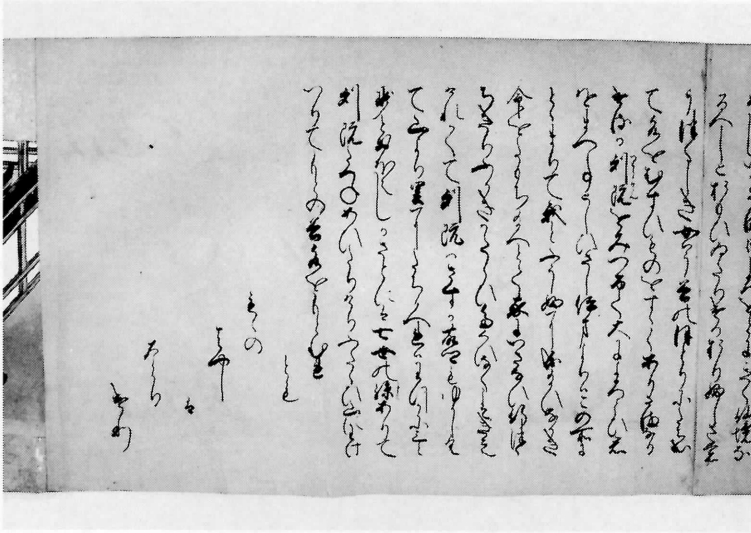
第18紙



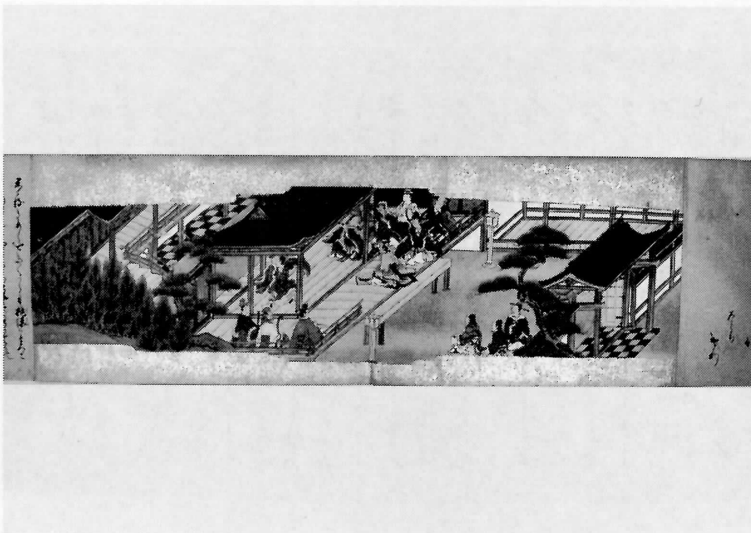
第19紙（絵⑤）



第20紙



第21紙



第22紙 (絵⑥)



第22紙（絵⑥A）



第22紙（絵⑥B）



第25紙